



ネイチャーなら

《わたしたちは大和の自然を愛します》

発行2019年12月1日

12月 第215号

奈良・人と自然の会



< 蕎麦の収穫（実りの森） >



Contents



ホームページでは、カラーで見ることができます

URL <http://www.naranature.com>

壮春力歩	1	自然教室報告	10
Monthly Repo. ならやま	2	やさしい病害虫講座	11
私のふるさと	3	ならやま投句箱	12
里山の今・虫だより	4・5	Galleryならやま	13
芋掘りイベント報告	6	ならやまプロジェクト	14
もう一つの学び舎報告	7	行事案内1	15
月例研修会報告	8	行事案内2	16
歴文研修会報告	9	幹事会報告・編集後記	17



1分半のプレゼン

会長 鈴木 末一

Green Gift 地球元気プログラム・キックオフ会議の案内文書が届いた。各種会合の団体紹介で、プレゼンテーション（以下プレゼンと略）の経験は積んできたつもりだ。通例は6分、15分、40分程度。これは5、6分だろうと見当がつく。

ところが、読み進めると「1分半」とある。驚いた。どのような内容にするか、ポイントをどこに置くかを1分半にまとめねばならない。至難の業だ。その日からプレゼンとの格闘が始まった。

「なぜ大層に考えるのか。たかがプレゼン。気楽に考えてもよいではないか」と言われるかもしれない。されどプレゼンだ。与えられた時間で簡潔にして要領よく、しかも聴く人に全体像を伝える必要がある。そんなフレーズはないものかと考える日々が続いた。

当日、新幹線の車中で何度もリハーサルに励む。時間内に収めようとする、内容が物足りず、平々凡々になりかねない。何としてでも聴く人の印象に残したい。思案に暮れるうちに東京に着く。ええい、数秒のタイムオーバーは許してもらおう、と腹をくくる。

プレゼンが始まった。次々に登壇する若い世代に圧倒された。いずれも理路整然、簡潔明瞭。臆せず歯切れもよい。活動の様子が明確に伝わってきた。さすがに数多あるNPOや任意団体の中から選抜された若者たちだ。

いよいよ本番だ。「3年間の充電期間にビッグニュースがあります。内閣総理大臣表彰で陛下に拝謁し、当会の説明をした際、会の説明をしたが無反応なので、急きょ、マツタケ再生にチャレンジしていますと申し上げますと、破顔一笑、『それは楽しみですね』とのお言葉を賜りました。二つ目は、今年8月22日、『天声人語』に掲載され、ならやまは全国区になりました。これらの栄に恥じることはないよう、親と子の絆が深まる自然体験イベントを企画していきたいと思えます」。

秒針とにらめっこのチャレンジから解放され、ほっと一息つく。「1分半で言い尽くせたはず」と、自分に褒美を与えたい気持ちにもなる。

今年ほど印象深い会合はなかった。それは、シニア世代のベテランぞろいの時と息子や娘の年代ともいえる若い世代が多数を占める時の対照的な場面を経験し、学ぶべきことが多々あった。

各種会合で気になっていることがある。シニア世代が多い場合、制限時間の合図を無視するかのように延長戦に突入するケースに出くわす。それなりに情熱を燃やしてのことだろうと苦言は控えてきた。半面「時間です」の合図に正直に反応して、尻切れトンボで終わるプレゼンもあった。

一方、制限時間1分半というプレゼンにチャレンジする若者たちに教えられたのは、自分たち(団体)がどういう存在か、理解してほしい点は何なのかを分かりやすく話せるように整理することだ。気の利いたフレーズを探すことではない。そのようなことが「伝わるコミュニケーション」の出発点になるのではと考えられる。

人に何かをうまく伝えることは、簡単なようではなかなか難しい。1分半プレゼンの会合から2週間後に、「伝えるコツ」というセミナーを受講した。講師がクリエイティブ・ディレクター、コピーライター(電通)の方で、期待どおりの内容であった。

プレゼンのまとめのコツとして団体のスローガンを「ひとこと」で表現する課題が与えられた。

「すべては次世代の子どもたちのために」を例示した。講師の方から、「活動内容は伝わってくるが、後継者に思いを馳せたカジュアルな表現をしても」と、次の三点のアドバイスをいただいた。

① ダイレクトに「一緒にやろう」という投げかけを行う。

「里山に、世代をこえた知恵を持ち寄ろう」

② 活動を通じて得られる「やりがい」「楽しさ」を訴求する。

「里山保全に、人生を生かす幸せ」

③ 次世代に開かれたイメージを訴求する。

「里山で、遊ぶ、守る、つながる」

我々の使命が後継者や子どもたちに、より伝わるよう参考にしたい。

Monthly Repo. ならやま

八木 順一

10月24日(木) 活動 曇りのち雨 60名+9名

お昼には雨が降り出し、昼食後に本日の活動は終了。打ち合わせでは新入会員の紹介のほか、助成金会議出席の報告がある。もう一つの学び舎関係 4 名、近大生 4 名、そして奈良テレビから 1 名来訪。里山 G は林内の整備とイベント準備、エコ G は葉菜・根菜の間引きとシイタケ収穫、そして景観 G は佐保自然の森の草刈りを行う。またビオ班はメイン階段調整工事の手伝い、花班は百日草の撤去、そしてパト G はメイン階段の仕上げ工事に取り組む。その他果樹班はイチジクの収穫が中心となる。

10月26日(土)イベント曇り後晴れ 36名+59名

天候が心配された朝。しかしその後は徐々に天候も回復する。最初はメインのイモ掘り。今年は面白い形のイモが豊作だ。そのあとは大きさや重さなどを競ってのイモコンテストを実施する。昼には心づくしの豚汁を堪能した後、焼き芋を賞味。午後は里山に入っのブランコやバランスなどの自然遊びや立ち木の伐採に挑戦。今年からハンモックがニューフェイスとして登場。自然遊びを盛り上げる。

10月31日(木) 活動 晴れ 81名+1名

メイン階段が完成。朝一番に通り初めが行われる。「きれい」「上がりやすい」といった声がしき



りだ。これからはも古くなった施設等の改修や修復が待っている。全員協力し

て作業を進めたいものだ。打ち合わせではこの件のほか 10 月に実施されたイベントの報告やお礼が行われる。参加者の多くからお褒めの言葉や感謝のお礼が届いているとのこと。見学者 1 名。里山 G は枯死木の伐採と薪割り、イベントの後片付け、エコ G はイネの脱穀とカボチャ畑の草取り、そして景観 G は実りの森の草刈りを行う。またビオ班は水生生物調査と水路の補修、花班はビオラの移植と葉ボタン施肥、そしてパト G は丸太階段の補修と 3 コースのパトロールを行う。

11月7日(木) 活動 晴れ 73名+5名

久しぶりのアダプトプログラム。サイクリングロード周辺のゴミ集めと袋詰め作業を全員で行い、約 30 分で終わる。多くのゴミがある。里山 G は下草刈りの他つつじの植え付け、エコ G は夏野菜の撤収と玉ねぎ畑へのチップ入れ、そして景観 G は真竹の後始末を行うが、チップパー機に手こずる。またビオ班は近大生と池の調査、花班はビオラ・キンセンカ等の種まき、パト G は 4 コースのパトロールを行う。その他果樹班はコンニャクの芋を掘り上げる。

11月14日(木) 活動 曇り 59名+21名

四日市下野地区から 21 名視察。当会の概要の説明後、ならやまフィールドを見学。打ち合わせでは会長から県の研修会や近大での里山学開催の紹介あり。またエコ G より先日実施の学び舎のお礼もある。里山 G は棚の補修や櫓木用コナラの伐採、エコ G はカボチャ畑へのチップ入れやサトイモの収穫、そして景観 G はチップパー機を使って真竹の後始末を行う。その他ビオ班は池調査、花班は花畑の草引き、そしてパト G は 1 コースのパトロールを回る。加えて果樹班は実りの森での植樹の場所決めを行う。





八木 順一

わが故郷はここ関西から、そんなに遠くではない。岐阜の大垣、実際はそのすぐ近くの町である。電車では2時間程、車でも2時間余りで帰ることも可能だ。しかし、この故郷とも年を経るにしたがってだんだん疎遠になった。特に親が鬼籍に入って以来ますます遠くなったなあ、と実感する。ひどいときには年に一回、お盆の墓参りだけ、といった状態が続いている。

高校時代までここで過ごし、それ以降は京都やその近郊で生活をしてきたのだが、休みのたびに実家に帰れる、と思うだけで心躍った思い出は、誰にもあるだろう。京都から電車に乗り、大津、近江八幡、そして彦根、米原を過ぎ、さらに関ヶ原も通過し、段々大垣に近づくと、ますます心が高ぶったものだった。

また、帰省する度に家にいつかず、中学や高校の時の親しかった友の家に入り浸り、親に文句を言われたのも再三だった。特に大垣の友の家に足を運ぶことが多く、何度も他の友達と一緒に夜を通して飲み明かし、相手の家族の方に迷惑をかけたことも何度もあった。しかし、この友も大学を卒業し、しばらくして自ら命を絶ち、今は親しく飲み明かすといったことも叶わなくなった。あれから既に間もなく50年近く経る計算になる。年は取りたくないものだ。

そして、時間があれば歩き回った大垣を中心とした名所・旧蹟も頭を巡る。特に松尾芭蕉の奥の細道のむすびの地として知られ、現在も市街地の南部の船町という所には【蛤のふたみに別れ行く秋ぞ】の句碑が残る。芭蕉はここから船に乗って

桑名に向かい、さらに難波に足を延ばして生涯を終えることとなる。また、安土桃山時代の終わり、関ヶ原の戦いの際には西軍の石田三成が一時本陣を構えた大垣城も再建されたものとはいえ、現在もその美しい城郭を見せてくれている。ちなみに関ヶ原古戦場までは小一時間で足を延ばせる。古戦場や古代の不破の関跡等は歴史文化クラブで訪れたことがあるので、記憶に新しい方もおられるだろう。

その他、大垣は、伊吹山系からの伏流水が湧き出る地としてもつとに有名で、水量も豊富で別名「水都」といった名前でも知られる。その為、かつてはこの清らかな水を利用しての紡績業も盛んであった。逆にここは近くを流れる木曾川・揖斐川そして長良川の三川が合流する地域に近く、古来からその被害に苦しんできた所でもある。江戸時代中期の宝暦治水事件で薩摩藩を苦しめた歴史もあるし、洪水から家屋を守るために石垣を積んで家屋を守った輪中が形成された場所として地理で学んだ記憶を持つ方も多いのではないか。

しかし『ふるさとは遠きにありて思うもの』の句通り、故郷とは物理的に疎くなって行くのと反対に、近年ますます心の中では近くなっている、と実感している。特に眠っているときに、幼い時から青春時代にかけての思い出が、彷彿と頭に浮かび上がり、時には冷や汗をかいて朝まで眠れなくなる、といったことも多くなった。やはり人間というものは最後の最後にはいい意味でも悪い意味でも生まれ故郷に帰るべきものなのだろうか。



里山グループ

◆ 秋の里山雑感

高城 光一

里山の木々は秋本番を迎えています。3月にはおいしそうな新芽を出していたコシアブラもすっかり黄葉し、天ぷらになど、とんでもない、ひねた風情を漂わせています。目を土に向けるとドングリが秋の盛りを演出していますが種類は少ないようです。実質新米会員（会員歴は少々）の筆者が里山のドングリを探しましたがコナラ、クヌギ、ツクバネガシしか見つけれませんでした。ある時にはキノコ類が一斉に出現したと思ったらあっという間に消えました。見えない部分でも季節は変わっており、杉山さんの話では木肌をむいた時、春には簡単にむけたものが秋にはなかなかむけないとのこと。木が水を吸い上げなくなった証拠ですね。

里山グループには美女4姉妹を中核とした薪作り班ともいべきプロ集団がおられます。今回は薪班の近況を少々。最近までナラ枯れが続いたため、コナラやクヌギの原木が潤沢にあったがナラ枯れの終息に伴い原木が不足してきました。当面は楢木用のコナラやクヌギを採取する際に除外された部分を薪に回すので問題はないのですが、中長期的には原木不足が課題のようです。ところが、薪の品質が向上し（薪割り技術の向上とナラ枯れ原木の消化）、一方販売努力が実を結び、先物契約ができるほど好調な売れ行きです（万歳！）。薪割り作業で面白いことは薪の中から色んな昆虫の幼虫にお目にかかることです。県の絶滅危惧種のオオムツボシタマムシというヤツに遭遇し感激したことも（菊川さん認定）。また、薪に潜む幼虫の多くは炒めるとクリーミーで大変うまく、酒のさかなとしては絶品とか。

話はかわりますが野中ともよさん（元NHKニュースキャスター）の講演記録に印象深い話がありましたのでご紹介します。「感じる力……それは生きてゆく力なのだと思います。それには森に行けばよい。そこに身をおけば私たち自ら発露して育んでくれる力が生まれてくるのです。」

里山の今



エコファームグループ

◆ お米のはなし

井戸 八穂子

少し昔、米穀通帳という物があってお米を買うためには絶対に必要でしたね。1942年～1981年まで発行されていましたが、実質は1972年ころには物価統制令の除外項目になって自主流通米がどこの米穀店でも自由に購入できるようになりました。今ではいろいろな地方からのブランド米がスーパーの店頭で並んでいます。

新潟産等の有名な「コシヒカリ」は農林22号を母に農林1号を父として福井県農業試験場で1956年に誕生しました。

また、奈良県では栽培される米の7割が「ヒノヒカリ」です。「ヒノヒカリ」は愛知県の「黄金晴」を母に「コシヒカリ」を父として1961年に宮崎総合農業試験場で誕生しました。昼夜の寒暖差が大きい盆地の気候が「ヒノヒカリ」の栽培に適しているそうです。

新しい品種を作るには今までは交配を繰り返して時間がかかっていましたが、今ではゲノム編集によって短時間でできるでしょう。でも、遺伝子組み換え食品の安全性については解明されていないから、市場に出回るのは先のことです。2012年に開発されたクリスパー・キャスナインという技術は遺伝子の突然変異を人工的に起こすことができるそうです。将来の気候異変や人口爆発に備えて穀類を安全に量産させる技術として注目されています。

1993年の冷夏による米不足は1991年に起きたフィリピンの火山噴火が原因の一つといわれています。今年も東日本の長梅雨で米の出来高を心配していましたが、新米がスーパーに山と積まれているのを見てほっとしました。

それにしても新しい名前の米がどんどん出てきていますね。

「恋の予感」と命名されたお米もあるそうです。お店の人に「恋の予感を5キロください」などと言うのは少し恥ずかしいですね。

皆さまはどの銘柄がお勧めですか。

景観グループ

里山の今

ならやま虫だより



◆自然を満喫できる「ならやま」

田中 克彦

いろいろあった今年、自然災害の恐ろしさを目の当たりにする事象が全国の各地で相次ぎました。お見舞い申し上げます。

元々、水も空気も緑も花木も、当然のように存在するものなのでしょう。しかし、今の時代は、水も空気も緑も昔のように有るというのではなくなりました。誰かが守ったり、育てたり、増やしたりして行かねばならない時代です。



「ならやま」に初めて来たときを思うと、笹藪、藤のつる、イバラの棘、草木で前に進む事も難しい場所も多くありました。その時の風景と今の景観を見ると変われば変わるものだと思います。

大阪市内に住む小生には、動植物を見るには、植物園、動物園、公園などに出かけることが一番手っ取り早いのですが、「やはり野に置けレンゲソウ」です。園芸ブームでも、実際に野草を見る事は少ないのです。でも、「ならやま」では身近に自然を満喫できます。とても素晴らしいところです。

皆の活動と共に、これからも景観を守りたいと思います

老若男女、まだまだ若いです。

今後ともよろしく願います。



◆クロスジフユエダシヤク

菊川 年明

初冬を迎えると大方の昆虫は姿を消し、見かける昆虫はごくわずかになる。この時期によく目に留まるのは成虫で越冬する数種のチョウで、穏やかな日に出てきて、日光浴などをしている。

しかし、昆虫の中には変わり種がいて、冬に現れ、飛び回って繁殖行動をするものがある。シヤクガというガのグループの中の「フユシヤク」と呼ばれる一群のガである。

フユシヤクは、わが国では 30 種以上が知られていて、メスはいずれも翅が退化してなくなっているか、痕跡程度のものになっている。したがって、飛び回るのはオスだけである。

ならやまの林内でよく見かけるフユシヤクは「クロスジフユエダシヤク」である。オスは翅の開帳が 25mm 前後、メスは翅が痕跡程度で、体長は 12mm 前後である。

12 月の上旬、ならやまの林内をこのガのオスがひらひらと飛ぶ。年により増減がある。多い年は紙吹雪を撒いたようにたくさん飛ぶ。

メスは枯葉の上などに止まって、オスの飛来を待っているが、翅が痕跡程度で、体色は枯葉のような褐色なので、たいへん目に付きにくい。

生きていくのに条件の良くない冬に現れるのは天敵が少ないという利点があるからであろうか。また、メスに翅がないか、痕跡程度なのは体温の発散を防ぐためではないかと言われている。

名前についている「シヤク」というのは、このガの幼虫を尺取虫（しゃくとりむし）と呼ぶことに由来する。昔、尺貫法のもとで、物のおおよその長さを、親指と人差し指を用いて、それが幾つあるかで測ることを「尺を取る」と言ったが、幼虫の動きがその仕草に似ているところからである。



左がオス
右がメス

芋掘りイベントと自然観察会・報告

岡田 安弘

入賞者用の金・銀・銅に塗られたドングリメダル、土産用の鹿の折り紙や数珠玉ペンダント。いずれも仲間が丹念に手作りした。おやつと土産用のサツマイモ「紅はるか」は、食べごろになるよう1週間前に掘っておいた。この時期恒例となった小学生児童を中心に親子をならやまに招き実施する公開イベント「秋のめぐみだ！お芋を掘ろう！」は準備万端。10月26日(土)は心配された天候まで、仲間が秋晴れを用意したかのようだ。

午前9時半受付開始、児童22人、未就学児11人、保護者25人の計58人が参加した。接待側は会員36人とシニア自然大学校からの1人が参加された。

「わあ、大きい！」。ベースキャンプに近いイモ畑から早くも歓声が上がる。一人5株ずつ掘れるように1班(赤)、2班(青)、3班(黄)、4班(緑)に分かれ、それぞれの区画で掘り始める。名の通り鮮やかな赤い肌が現れると、傷つけないように小さなスコップで周りを丁寧に掘り下げる子。お母さんはスマホで我が子の撮影に忙しい。



【芋掘り風景】

収穫品から班ごとに品定め用のイモを集める。草津から通う小山喜与男さんを審査委員長にコンテスト。重さでは1班の1600gが1位、わずか10g差で4班が2位、つる部門は294cmの1班が1位、形の面白さは名前をつけて出品。拍手の大きさに決めた。4班のオットセイと1班の火星人が競り合う。小山委員長に決断を求め、オットセイに凱歌が挙がる。「やったあ」の声。金・銀・銅・ドングリのメダルは全員に贈呈された。



【芋掘りコンテスト風景】

昼食。まかない担当がイモ入りの豚汁を振る舞ってくれた。お碗を手に子らの列ができる。「おいしい！」と、おかわりが相次ぐ。その間に、おやつ用の焼き芋が出来上がった。仲間が次々と味見に集まる。私も加わった。とびきりうまい。「味見は一人がいい。子どもらのおやつやで」と進行役に叱られる。来年は気をつけたい。

午後は「ならやま探検」。雨上がりの山肌は足をとられる。小さな子の頑張りに驚く。頂上の「遊びの広場」まで張ってあるロープを頼りに登る。



【遊びの森で山遊び】

「我が子を見直しました」と言うお母さん。ハンゴを備えた木登り、ブランコ、今回は初めてハンモックも用意。平田範光さんの指導で、ノコギリと鋏を使って木の剪定にも挑む。

下山。ホクホクの焼き芋が配られた。「里山が理解できましたか?」。福田美伸さんが親子に語りかけた。「人が手を入れて守り育てた田畑、小川、草地など全てをくるんで里山と言うんだよ。日本の面積の40%を占めている。昔は薪や炭を作り、キノコや山菜を採った。緑のダムと呼んでいたんだ。水を貯め山が崩れない働きをしているんだよ。しかし手を加えないと3年でジャングルになって生き物が住めなくなる。自然の大切さを学んでくれたね」。

一人のけがもなく、お土産を手に帰路へ。「来年も来たい」。子らの声がうれしい。

もうひとつの学び舎 Repo.

火おこし体験をして、焼き芋をしよう

鈴木 末一

11月9日(土)、奈良NPOセンターと奈良市生涯学習財団の依頼により、次世代の担い手育成として「子どもの参画」を目的とした子ども向け体験活動「もうひとつの学び舎」を開催した。

奈良NPOセンター小島さんと奈良市生涯学習財団中部公民館福王館長、奈良YMCA藤井アドバイザー達に引率された20人の子どもたちは、13時にJR平城山駅東出口に集合。どのような表情をしているだろうかと興味津々で出かけた。ほとんどの子どもたちは、このような街中に緑溢れる里山林があるのだろうかと周囲を見渡し、半信半疑の表情であった。あと半時間もすれば、目を見張る日本の原風景である里山林に出会えるのだよ、と無言の声かけをし、ベースキャンプへ戻る。

一行は13時15分にベースキャンプに到着。歓迎の挨拶、日程説明、メインイベントである「芋掘り・焼き芋」と「ゲームや歌」について説明を受ける。いずれも初めての体験だけに緊張した面持ちで、聞いている姿勢も真剣そのものである。

13時30分、マッチの使い方や火の付け方について手ほどきを受ける。ドラム缶で火をおこす。薪材を入れて種火付け用の新聞紙や杉の枯葉などにマッチで火を付ける。マッチを使うのも初めての体験なのだ。半ドラ(半分に切断したドラム缶)の中で枯れ枝や薪などが勢いよく燃えてくるまでの間、焼き芋の準備にかかる。濡らした新聞紙で包みさらにアルミホイルで包む。全体に火が広がってきたころに、アルミホイルに包んだ芋を入れて焼き上がるのを待つのみ。「さあ～ておいしく焼き上がるかなあ～」。

その間を利用して、いよいよ芋掘りを開始。まず最初に芋の蔓を株下から切る。鋸鎌を扱う手つきも恐る恐る慎重そのものである。蔓を取り除くと芋の頭があちこちに顔を出してくれている。「わあ～お芋だあ～」と歓声が里山に響く。お芋を傷つけないように気を付けつつ、園芸コテで土を取

り除いていく。大きな芋が4～5個ぐらいずつ行儀良く縦に並んでいる。思わず上がる驚きの声。

蔓を片付けて、掘り上げた芋を広場へと運ぶ。1.5kg程の大きな芋もたくさんある。



焼き上がるまでの時間を利用して、当会の福田さんから「里山とは」のお話を聞く。10月26日の芋掘りイベントの時は、やや緊張気味であった福田さんも、話の展開の仕方などのノウハウを心得たよう。クイズなども織り交ぜての熱弁に、子どもたちも身を乗り出していた。

程なくして、辺り一面に香ばしい焼き芋の匂いが立ちこめてきた。待ちに待ったおいしい焼き芋の試食タイムだ。一人2個ずつ、大きく口を開けてかぶりつく。「紅はるか」種特有の甘さと食感に、どの子にも満面の笑みがこぼれる。

しばらくの間、秋の恵みを賞味した。満足した子、もっと食べたいなあーといった表情の子。中にはちゃっかり3個以上ほうばった子も…。

奈良YMCAの藤井さんのギター演奏による合唱やゲームなどで、20人の子どもたちの心が一つになっていった。

時の経つのは早く、15時40分になり後片付けと振り返りをして、市街地に隣接する緑豊かな里山林の中での体験活動も無事終了した。

「ならやま里山林」でのイベントを紹介したら、子どもたちが「参加したいっ」と大きな声で応じてくれた。自然との触れあいを通して、生きる力や自然の不思議さなどを感じ取ってくれることを期待したい。

「里山で遊ぶ 学ぶ つながる」

十津川月例研修

小島 武雄

10月21日(月)8時定刻5分前に全員集合、生駒交通のデラックスバス定員一杯の25名を乗せて出発。京奈和道を順調に進み五条から168号線に。車中ではこれから向かう紀伊山地霊場ビデオと各地到着予想時刻クイズの説明をして、谷瀬の吊り橋到着は10時27分。全長287m高さ54mのこの橋は、対岸住民の生活用の町道で、この前の水害土砂で高さはかなり低くなったそうです。揺れる足元からは十津川の清流が見え、スリル満点。バランスを取りながら吊り橋を往復。次は笹の滝へ向かいます。通る道が狭く別のマイクロバスに乗り換えました。それでも車幅ギリギリの道を30分。途中落石の箇所では度々運転手さんが降りて片付けをしなくては通行不能。

笹の滝は日本100滝に数えられています。小雨の中、濡れて滑る危ない岩の道で足場を鎖にたよって一人がやっとの岩のトンネルをくぐり抜ける



と、目の前にはごうごうたる水流と水飛沫が降り注ぎます。なんとか皆無事に滝までたどり着くことができましたが、あまりの迫力に圧倒されてただ滝を見上げるのみ。息を飲むとはこの事でしょうか。

お昼は十津川郷道の駅でミニ丼定食。この頃から雨が本降りに。次の世界遺産「玉置神社」へ向かいます。途中工事で通行止の箇所を迂回し神社到着は2時53分。皆、雨具や傘の装備をして、薄暗い杉林の山道を下りて行きます。樹齢3千年の神代杉や1千年の巨大杉などを見上げて神社にお参り。ここから玉置山頂を目指す組と襖絵の鑑賞組に分かれる事に。薄暗い霧に覆われた社殿は、まさにパワースポット、霊気みなぎる神聖な佇まいに気持ちが引き締まります。

バスは本日の宿舎十津川温泉ホテル昴へ、源泉

掛け流し温泉で濡れた体を温めます。宴会場では古川参与の乾杯の挨拶に始まり十津川の山の幸を楽しみました。その後は二次会で遅くまで歓談。

翌朝は気持ちよく晴れ渡り、行けるかどうか？と心配していた小辺路の果無集落への険しい石段を登ることができました。最初に柳本橋という吊橋を渡ります。小さい橋ですが、揺れかたが半端ではありません。皆真剣に慎重に、これは写真を見てください。



この辺りの熊野古道が、こんなに細い石道や急な丸太階段の連続とは思いませんでした。

みんな黙々と登ります。片道40分の急坂道に大汗をかいてついに日本の里百選、果無集落到着。ここは、畑があり石畳の道が続く美しくのどかな風景の中で人々が生活している世界遺産です。テレビで見たあの看板おばあちゃんはいませんでした。世界遺産と書かれた大きな岩の前で記念撮影の後、濡れた石畳の道を帰ります。やはりお疲れで途中滑って尻餅をつく人多数。十津川温泉に戻り、ホテル昴の前の気持ちのいい風の吹く芝生広場で、少し早い昼食は名物のめはり弁当。

その後最後の目的地へ、バスは熊野本宮大社を目指します。途中の十二滝で小休止、滝の足元にはちょうど虹がかかっていました。果無峠で疲れた足をかばい、熊野本宮大社を参拝し、旧社地大斎原まで歩いて行程は全て終了しました。

帰りのバスでは趣向を凝らしたクイズなどで楽しみ近鉄奈良到着は17時30分、楽しい研修旅行は終了しました。皆さまお疲れさまでした。



11 月歴史文化クラブ研修会・報告
和爾氏の実像：系譜と奥津城を探る

塩本 勝也

前日の雨にかわり、今日 11 月 12 日は、まさに歴史日和です。ワニ氏の本貫地の天理で、その実像を探る旅のガイダンスとコース案内を受け、総勢 19 名は JR 樺本（いちのもと）駅前を出発。



まずはワニ氏より分枝した同族の柿本人麻呂の歌塚、小石を積むと歌作りがうまくなると聞く。続く木々の中の柿本寺跡をしのぶ。

和爾下神社古墳の上に祭られた、和爾下神社の広場で、藤田担当が「古代豪族ワニ氏の実像」について資料に基づき分かりやすく丁寧に説明をする。

ワニ氏は地名由来というより、漁労や水運などの海事関係に従事していた人達、すなわちワニ氏の住んでいた所が地名になったともいわれる。ワニ氏は応神天皇以後 7 代の天皇に后妃を送り出したが、皇子が即位した例はない。しかし、この事により王権内に隠然たる勢力を有した。ワニ氏の系譜、分枝と地方への展開、記紀の伝承や氏族の海人性などの研究成果を熱心に披露する。真剣に聞くメンバーもだんだん理解顔になる。



シャープ総合開発センターゲート前の横穴式石室を見る。ササユリ群生地保護のため石室周辺への立ち入りが規制されていた。

シャープ総合開発センターゲート前の横穴式石室を見る。ササユリ群生地保護のため石室周辺への立ち入りが規制されていた。

赤土山古墳の墳丘で昼食をとる。この古墳は前方後方墳とみられていたが発掘調査により前方後円墳と確認された。後円部の東側に造り出しがある。墳頂から奈良盆地を見下ろしながら、古川代表の解説でしばし、往時の古代豪族のさまを想定する。三輪山の麓の纏向に大王家、すぐ南に親衛隊の相伴、すぐ北には武力集団の物部、盆地の南



西部に葛城、北東部に和爾等々の豪族が割拠する。

古川節の名調子で、盆地が生き生きしてくるのは不思議である。

東大寺山古墳では古墳の形状や出土した「中平銘鉄刀」（国宝）について藤田担当が詳しく説明をした。後漢の鉄刀がこの古墳に埋設されるまでの 150 年ほどの経緯について見解が示された。その後、墳丘に登り、ここはどの部分、そうすると方墳部はどこかと議論が盛り上がる。

和爾坐赤坂比古神社は延喜式の式内大社にあてられている。東大寺のお水取りの悔過で、読み上げられる神名帳の和邇大明神と関係する由緒正しき神社ですかねと話される方がいた（多分）。また神宮寺として常楽寺があったが、明治初年に廃寺となり、仏像と他は隣接する善福寺に移された。

和珥坂下伝承地はこの旅の最後の訪問先で、古事記によれば和邇氏の祖人、彦国葺が武埴安彦の



征伐に出陣する際に戦勝祈願をこの辺り、和珥坂下で行っていたようである。

参加予定者が 2 名減り、期待の当日参加者はなしでしたが、女性 1 名と新人さん 1 名で楽しく回っていただけたと思います。帰りのバス時間を周知できず、バス停まで急がせたのは遺憾でした。

10月自然教室だより

「秋の平城宮跡・自然観察会」報告

辻本 信一

10月28日(月)平城宮跡にて、雲一つない澄みきった秋空のもと、自然観察会を実施しました。参加者は12名。

今回も田代貢先生に解説をお願いし、植物を中心に「目からうろこのお話」をたくさんご披露いただきました。



【朝の集合写真】

午前10時、あいさつのあと田代先生の足は一直線にアラカシの木に向かい観察会スタート。アラカシの若い果実(ドングリ)の頭の先にある3本の柱頭に注目。

実物を指さし、図で更に解説していただくいつものスタイルで観察会の幕が切っておとされました。



【スケッチブックを片手に】

参加者の手元には事前に準備された田代先生特製の解説図入り手書き観察ルートマップ。

その中には、④スダジイ(雌花の先の3本の柱頭) ⑧シリブカガシ(雄花序と雌花序) ③アキニレ(胚珠の維管束) ⑩カラタチ(トゲと冬芽の位置関係) ⑨オオオナモミ(実の断面、2個の小花) ⑩イチイガシ(花柱と柱頭) ⑥ツユクサ(役割の違う3種類のオシベ) ⑧スギナ(茎断面) ①クロガネモチとモチノキ(葉腋につく実のつき方の違い) ①アオギリ(開いた心皮) ⑩ヨウシュヤマゴボウ(緑色の未熟な実と赤紫色に熟した実の二色効果)等々、それぞれの果実をテーマにした解説がびっしり書かれています。



【観察ルートマップ】

マップにはそれ以外にも20種近くの植物の観察ポイントが書かれていましたが、実際の説明はその倍近く、全部で植物40種近くに挙がりました。

観察コースは、平城宮跡内奈良文化財研究所北側の駐車場を出発点とし先ずは南に進み、資料館を過ぎたところで東に折れ、その後大極殿南端から更に南に進み線路を渡り大きく東側に迂回、東院庭園手前の駐車場で昼食の時間を迎えました。

昼食後は宇奈多理(うなたり)神社の横を北へと向かい、午後3時予定通り出発点に戻りました。



【モチノキの実の観察】 【澄みきった秋空の下】

たくさん解説をしていただきましたが、すべての紹介は無理なので、特に興味を引かれたもの3点を厳選し、以下に紹介させていただきます。

1. イヌマキの胎生種子(メヒルギが有名)
枝についた実から発芽が確認でき、植物にも母性を感じ新鮮な感動を覚えました。
2. クサギの実の二色効果
これまで足を踏み入れたことの無い観察地点。たくさんのクサギの実を鑑賞することができ、こんなところにと個人的に大収穫・大満足!
3. オオオナモミの小花

ヒツキ虫の代表格ながら、それを割って内面をはじめめてジックリ観察。大小二つの種子があり、小さい方は万が一のための予備。新潟の方言「もしかあんにゃ」(長男がもしかの場合には、次男が後を継ぎ長男に)の先生の説明に納得。



【アオギリの実の観察】 【クサギの実の二色効果】

次回は11月27日(水)奈良公園にて紅葉狩りを中心に自然観察会をおこないます。

皆さまの多数の参加をお待ちしております。

やさしい病害虫講座 35

エンドウの病害虫

木村 裕

ならやまで困りものと言えは真っ先に浮かぶのはカラスさんでしょう。実エンドウ、キヌサヤエンドウ、スナップエンドウの蔓を遊び道具？にしているようです。防除対策は残念ながら害獣・害鳥は私の守備範囲外で、タカとかワシにも知り合いはいないのでパス。

【ナモグリバエ】

ハエの幼虫が葉の中でトンネルを掘るように葉の中身を食い進みますので、その部分が白い筋となって葉裏に表れます。被害が多いときには葉表にも現れます。

成虫は長さ2mm位の小さな灰色のハエで、尾端で葉の表面を傷つけ、そこからしみ出す汁液をなめています。その小さな傷口が白い斑点となって点々と並びます。また、メスの成虫は尾端で葉を傷つけて葉内に卵を1個ずつ産みこみますが、その部分も白い点々になって表れます。



(上方の白い点々は成虫の吸汁跡と産卵痕、白い筋は幼虫の食い跡、透けて見えるのは幼虫)

幼虫は葉肉を食べて育ちます。ヤジウマ半分での状況を眺めようとするお茶目な子はいません。やがて葉のなかで蛹になり、外部からも黒い米粒のような蛹が透けて見えます。

実害の程度は分かりにくいですが、多くの葉が被害を受けると株全体が衰弱して、株の枯れあがりになります。

幼虫はエンドウの他、いろいろな野菜の葉に潜りますが、他の野菜では多発することはありません。セロリやネギなどにも葉潜り被害がよく表れますがこれは別の害虫の被害で、濡れ衣です。

【うどんこ病】

葉に小麦粉を振りかけたように白い粉が付着します。発生初期は、葉に白い粉が斑紋状に表れます。実が付き始める頃から一気に広がって葉ばかりでなく、茎も豆のさやも白くなります。このようになると株全体が衰弱して、花がつかなくなり、はやばやと店じまいとなります。



天気が続いて乾燥状態になると、病気は勢いを強めます。

防除対策としては、白い粉がポツポツと見つかり始めたときにうどんこ病専用の薬剤を散布します。いろいろな薬剤がありますがみんな農協扱い品で手に入りにくいです。しかし園芸店にも、うどんこ病に効果のあるスプレー剤（霧吹き容器入り）が1種類あります。

【ヨトウガ】

5月の連休頃から緑色のイモムシが発生して葉に孔をあけ、ときには葉をボロボロにします。

成虫の蛾が葉の裏に数百個の卵を一塊にして産みつけますので、ふ化した小さな幼虫は手を携えて葉の裏側を食べ始めます。そのため、虫の集団がいる葉は裏側を食べられて半透明になります。葉の裏側を見てください。多くのアオムシがずらりと並んでいます。蔓の誘引時や実の収穫時に被害葉を見つけたら葉ごと切り取って処分しましょう。油断すると周りの葉に広がり、被害も目立ってきます。成長の早い仲間は体色が黒くなり、別の虫のようになります。

【アブラムシ】

緑色の大きなアブラムシがつくことがあります。無視しましょう。



ならやまトーク・投句（晩秋編）

《ならやまのイベント風景》

オットセイ子等の名付けしさつま芋

（親と子の芋ほりイベント。掘り出したお芋の形を競う。オットセイに見立てた芋が見事金賞に）
藤原 勉

団栗やメダルになりて魅る

（親子の自然教室。入賞メダルの金色に塗った団栗を首に誇らしげな子ら）
岡田安弘

猿の子のごと焼芋を頬張れり

（焼きたてのお芋を親も子も夢中で頬ばる。「猿の子」とは・・・）
ハ本順一

腰まげて落穂拾ふや子らのあと

（佐保台5年生の稲刈り。米一粒の大切さもぜひ知ってほしかった）
岡田安弘

草の音一つ二つと蝗飛ぶ

（稲刈りの終った田圃、田を追われたイナゴが畔の草むらに）
鈴木末一

稽田や案山子の顔の皺の数

（案山子の顔に皺、ご苦労さん。稽田は切株にひこばえの伸びた田）
鈴木末一

空高し一筋の伸び飛行機雲

（脱穀が済んで広々した田圃。秋晴れの空を仰げば一条の飛行雲）
ハ本順一

投句歓迎（古川まで）

《十津川へ秋の一日旅行など》

白萩の懸れるがごと笹の滝

（笹の滝。白く泡立ち落ちる姿を白萩と観た作者の感性・・・）
坂東久平

滝音に舞う黄葉葉の裏表

（笹の滝、爆音に圧倒されてしばし佇む。季節には早い黄葉が舞う）
古川祐司

玉石へ霧の杉道神の声

（巨大な杉の立並ぶ山道を行く。時雨に濡れた玉石が神秘的に座す）
羽尻 嵩

吊橋の揺れて目にしむ七竈

（足のすくむ思いの吊橋。鮮やかなナナカマドの紅葉に怖さを忘れる）
藤原 勉

一休み果無古道秋の風

（急峻な山道で一休み、連山に目をやれば秋の風が体に沁みる）
羽尻 嵩

煙草代そつと上げたね秋の夜

（いまや愛煙家は犯罪者扱い。煙草がきれた深夜、値上げを知る）
岡田安弘

佐保の里万年茸に奇遇せり

（奇瑞とされる「万年茸」。ならやまで見つかった。床の間に飾ると）
小山喜与男



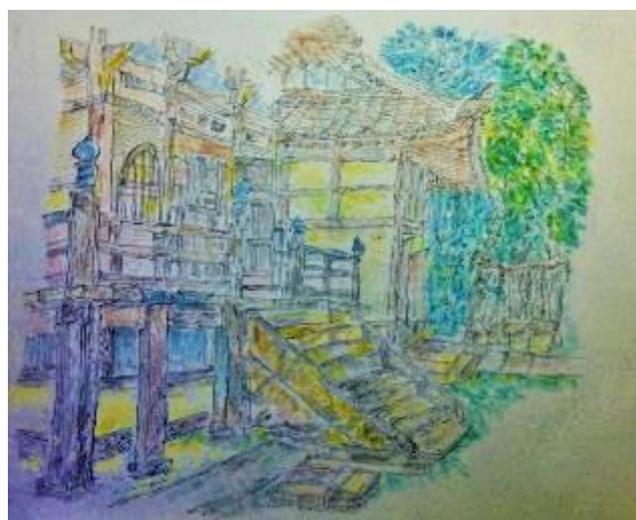
Gallery ならやま



▲油彩 30 号「明日香」 小田 進八郎



▲陶芸「一輪挿し」 西岡 正平



▲水彩画「石山寺」 八木 順一



▲クラフト「干支」 鈴木 末一



▲クラフト「干支」 大澤 教男

掲載作品はホームページではカラーでご覧いただけます。皆さまからの作品のご応募をお待ちしております。絵画・陶芸・写真・墨絵・手芸・パッチワーク・切り絵・自然工作など。

ならやまプロジェクト

明るく・楽しく・無理をせず

活動予定日

12月	5 (木) 12 (木) 19 (木)
1月	9 (木) 16 (木) 23 (木) 30 (木)

◆場所：奈良市佐紀町、奈良阪町、法蓮町、法華寺町にまたがる約 16 haの里山林地（県有林）

◆集合：現地ベースキャンプ地・午前 9 時

◆終了予定：午後 3 時

◆アクセス

① JR平城山駅下車：東口から南へ徒歩 10 分

② 近鉄奈良駅：バス 13 番乗り場 115 系統

8：28 発、高の原行き（平日）

③ 近鉄高の原駅：バス 1 番乗り場 115 系統

8：36 発 JR 奈良駅西口行き（平日）

②③とも「佐保台西口」又は「平城大橋」下車
徒歩 7 分

◆携行品など：弁当、飲み物、軍手（作業用具は現地で用意）



◆環境保護のため、お椀、箸、コップなどは各自ご持参ください。



◆連絡先：八木 順一

里山

12 / 19 協働活動日・アダプトプログラム

景観

12 / 5 12

ホダ木伐倒

薪割り

植樹付近の下草刈り

迎春準備

松整備地区、松山平、松枯れ被害木処理

19

迎春準備

松整備地区、松山平、松枯れ被害木処理



12 / 5 整備：彩の森整備（伐採、粉碎）

養蜂：巣箱の手入れ

ビオ池：池整備

花：西花園の草取り、モミジアオイの撤去

12

整備：BC 竹林整備（伐採、粉碎）

養蜂：巣箱周辺の整備

ビオ池：タナゴ池調査（近畿大班）

花：茗荷園刈り取り、アジサイ移植

19

整備：BC 竹林整備（伐採、粉碎）

養蜂：巣箱周辺の整備

ビオ池：池整備

花：日蔭植物園の草取り整備

エコファーム

12 / 5

里芋、冬野菜など収穫、チップ入れ

エコビニールハウス草刈り整備

果樹：実りの森、果樹の苗床作り

12

芋煮会

冬野菜など収穫

果樹：実りの森、果樹の苗床作り

19

迎春準備、里芋、冬野菜収穫

チップ入れ

果樹：実りの森、果樹の植え込み

パトロール

12 / 5 観察路整備／丸太階段補修、ロープ点

検／落下枝片付け／ミーティング

12 観察路全体点検／

丸太階段補修、ロープ点検

19 テント倉庫清掃／備品整備

パトロールコース：4→1

行事案内 Part 1



12 月度歴史文研修会ご案内

「地元史探訪と座学」

— 講演「元興寺今昔」とならまち遺構探訪 —

永井 幸次

元興寺は蘇我馬子が 596 年に建立した飛鳥寺（法興寺）が前身とされ、平城遷都に伴い現在の地に元興寺として新たに伽藍が建立されました。南都七大寺の一つとして、東大寺や興福寺と並ぶ大伽藍を誇っていましたが、室町と江戸時代に伽藍が、さらに江戸時代末に五重塔が焼失するに及んで、元興寺は衰えていきます。

現在は極楽坊と禅室のある中院町の「元興寺極楽坊」（本尊：智光曼荼羅図）と、五重塔の塔跡が残る芝新屋町の「元興寺（塔跡）」（本尊：十一面観音立像）の二つに分かれて存在しています。

極楽坊と禅室には飛鳥寺から運ばれた柱や瓦が今もそのまま使われています。木材は 582 年頃に伐採されたものであることが年輪年代法で分かりました。

元興寺（塔跡）に建っていた五重塔は東寺の五重塔より大きかったと伝えられています。

辻村泰道副住職の興味深い講演と、「ならまち」が元興寺の境内であった「証」を発見して、隆盛を極めた当時に思いを馳せてみたいとおもいます。多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

【実施要領】

日時：令和元年 12 月 10 日（火）雨天実施

集合場所：近鉄奈良駅行基像前 9:00 集合

募集人員：30 名程度（講堂収容人数）

持ち物：弁当 飲み物 雨具

午前の部：講演・国宝元興寺極楽堂（極楽坊本堂）

演題・「元興寺今昔」 10:00～11:30

午後の部：ならまちセンター 13:00 集合

元興寺ゆかりの遺跡探索

世話人：永井幸次 八木健彦（中井弘）

申込み先：事務局 青木幸子

歴史文化クラブ主催＜一般募集＞

令和 2 年度新春初詣

「大神神社初詣と三輪山登拝」

今回は、記念すべき令和の時代の第一回初詣になります。

大神神社の拝殿に昇殿して、



拝殿奥正面にある「三つの鳥居」を通してご神体の「三輪山」を遥拝、神官の厳粛なお祓いを受け「奈良・人と自然の会」の行事の安全と会員の皆さまの健勝を祈願します。

次いで「三輪山」に登り山頂の大物主命の依代「奥津磐座」を登拝します。なお、三輪山に登拝されない方は、古川さんが麓の由緒ある神社等をご案内します。

大神神社には本殿はなく、奥津（おおもものぬしのみこと大物主命）・中津（おこなむちのみこと大己貴命）・辺津（すくなひこなのみこと少彦名命）の磐座を神の依代として、ご神体である三輪山を拝む古来の信仰形態を今日も継承しています。現在の拝殿は徳川四代将軍家綱が、1664 年（寛文 4 年）に再建したものです。

下山後、「福神堂」にて名物・三輪そうめんと地元銘酒・御諸杉にて恒例の新春懇親会を行います。奮ってご参加ください。

歴文事務局 中井 弘

【実施要領】

日時：令和 2 年正月 14 日（火）雨天実施

集合場所：JR 三輪駅前 9 時 10 分集合

交通機関：・近鉄西大寺（8:05 急行）⇒天理乗換

JR 天理発（8:51）⇒三輪（9:03）

・JR 奈良（8:37）⇒天理（8:51）⇒三輪（9:03）

・JR 桜井（9:06）⇒三輪（9:09）

大神神社お祓い費用：奈良・人と自然の会より

福神堂飲食費：各自負担（2 千円位）

担当世話人：富井忠雄 中井弘・（古川祐司）申込み先：青木幸子

行事案内 Part 2

ならやま、芋煮会のご案内

吉川 利文



日時：12月12日(木) 12時～

雨天の場合、翌13日(金)に順延

場所：ならやまベースキャンプ

会費：無料

持ち物：お椀、お皿、コップ、箸など。

ならやまを吹き渡る風がほおにひんやり感じる初冬を迎えました。そんな季節にふさわしい恒例の芋煮会を、にぎやかにを行います。

もともと芋煮会は、山形県など東北地方で古くから行われてきた晩秋～初冬の季節行事で、家族、友人、地域の人たちがサトイモを使った鍋料理を野外で作って食べる催しです。親睦を深め、コミュニケーションを図れるので、最近では、「イモ煮とコミュニケーションを合わせ、「イモコミュニケーション」という造語までできるほど親しまれているとか。ならやまでも、この一年間いろいろあった“ならやま生活”を和やかに締めくくり、会員同士が親睦と信頼を確認し合う恒例行事として続けてきました

ならやまで作っているサトイモは三種類。主役は福井県原産の「越前大野イモ」と山形県・最上川原産の「甚五右衛門」でしょう。越前大野イモは、これまで5年間、種イモをならやまで生産し使っているのです。すっかり「ならやま大野イモ」になっています。「甚五右衛門」は原産地で“一子相伝”とされてきましたが、もう何年もならやまで種イモを取っていて、これもならやまの土になじんでいます。もうひとつは、「エビイモ」。京都で「京イモ」と呼ばれ、茎が赤いのが特徴です。いずれもこの夏、日照りと酷暑のため、一時枯れかかる危機がありましたが、水管理で乗り越え、出来栄は上々です。

当日は、これらサトイモを中心に、ならやま産の野菜や牛肉をふんだんに加えた芋煮が振る舞われます。また、佐保台小学校の児童たちが植えてくれた新米のおにぎりや心づくしの料理が花を添えます。多数のご参加をお待ちします。

忘年会のご案内



振り返って見るとあっという間の一年でした。今年も残すところあとわずか。恒例の忘年会を、下記要領にて盛大に開催いたします。会員の皆さまが一堂に会し、思い思いにご歓談いただける数少ない機会です。

何かとご多用のこととは存じますが、万障お繰り合わせのうえ、ぜひとも、ご参加いただきますようお願い申し上げます。

記

1. 日時：12月7日(土) 11:30～14:30
2. 場所：「花鹿」(かじか)
奈良市奈保町 2-12 (0742-22-0505)
3. 会費：4,000円
4. 申込：12月3日(火)までに下記担当にお問い合わせいたします。

戸田博子／青木幸子／(澤田好男)

5. 交通：JR奈良駅、近鉄奈良駅より下記時刻に「花鹿」手配のチャーターバスが出ます。
 - ・11:00 JR奈良駅西口ロータリー 一般車両乗降車場
 - ・11:10 近鉄奈良駅⇒奈良県商工観光館前 上記チャーターバスに乗り遅れた方は、JR奈良駅西口(15番乗場)、あるいは近鉄奈良駅前(13番乗場・駅西改札口から西北へ徒歩3分やすらぎの道)にて路線バス(「高の原駅」行き、または「加茂駅」行き)にご乗車の上、黒髪奈保町停留所で下車してください。徒歩1分。

みなさまのご参加、お待ちしております。

1月ならやま活動&行事予告

- * ならやま活動(木)
 - 9日 初出式 餅つき・七草がゆ
- * 歴史研修会
 - 14日(火) 大神神社初詣と三輪山登拝
- * 新春講演会 講師：木村全邦氏
 - 26日(日) 「森と水の源流館」企画調査班長

2019年11月度幹事会報告

日時： 10月29日(火) 14:00~16:00
 場所： 奈良市中部公民館
 出席者：19名、欠席者：4名

(議事録よりトピックスのみ)

1 会長挨拶

- ・ 図録反響大、第2弾「樹木編」検討したい
- ・ 新規助成金決定
- ・ 松ガレ発生について県へ連絡

II 事務局・会計報告

- ・ 会員数：171名(5名退会、6名入会)
- ・ 9月度会計報告(グループ別支出集計および2019年度上期会計表別途発行)

III 企画・助成金事業案件

- ・ 図録「見つけよう自然のなかまーならやまの木々ー」について編集準備委員会を設立。協力スタッフの募集
- ・ 各種助成金関係申請完了
- ・ 助成金打ち合わせ会報告
- ・ 活動中間報告1件提出

IV 喫緊・提案事項

- ・ 忘年会 12月7日「花鹿」にて開催
- ・ シニア自然大学校進路ガイダンス：1月19日
- ・ 新春講演会・懇親会：1月26日(日)
 会場：ホテルリガーレ春日野
- ・ 「もうひとつの学び舎」：11月9日(土)(芋掘り・焼き芋・野外ゲームなど)
 応募者多数につき定員増、材料費補助とお土産提供
- ・ 新階段渡り初めセレモニー：10月31日実施

V 広報関係

- ・ 12月号会報誌編成と執筆者の確認
- ・ 「私のふるさと」投稿あり

VI 報告・連絡事項

- ・ 活動報告と予告：会報誌参照
- ・ 12月度幹事会 12月24日

◆ 申し合わせ ◆

* 通常活動日【木曜日】や屋外のイベントは、前日19時前のNHKの天気予報(奈良气象台17時発)で、当該地域の午前の降水確率が60%以上の場合、中止とします。

お問い合わせ:八木

* 通常活動日が中止になった場合は、翌日【金曜日】を振替活動日とします。

* 臨時活動日を月曜日にすることがあります。(事前に担当役員から連絡します。)



<黄葉>

色づく秋、各地の紅葉の名所ではその燃えるような美しい景色に圧倒され、まさに気持ちも高揚する。

一方、東北の黄葉の素晴らしさは飽きることがない。道南から東北をゆっくりと周遊。奥深いブナ林が見せるスケールの大きい一面の黄葉に出会うと、小さな自分はその暖かく深い森の懐に吸いこまれてしまうような気がする。ブナ林が多く残る東北ならではの。

万葉集には「紅葉」は一例しかなく、色づく様子は「黄葉」で表されている。「もみじ」は色づくという意味の「もみず」から変化した言葉だそう。もともと古(いにしえ)では黄葉する樹木が主体で紅葉する樹木は少なかったのかも。平安時代以降に庭園文化が盛んになるとともに、庭に映える「紅葉」樹木が多く植えられ、その美しさを愛でるようになったのだろう。

美しい景色と包みこまれるような暖かみのある自然の違いをちょっぴり感じた小旅行だった。

発行:奈良・人と自然の会

会長 鈴木 末一

URL : <http://www.naranature.com>



編集チーム：青木(幸)、青木(芳)、澤田、千載、田代、戸田、坂東、山崎

<表紙写真>

実りの森での蕎麦の刈り取りと脱穀の準備

以上